



## 東北を想う

東北生産性本部会長 宇部 文雄

今年作家の司馬遼太郎没後20年。司馬作品には職場の先輩の導きもあって、数多くの作品に触れてきましたが改めて挑戦、司馬さんは東北を、東北人をどう見ていたか？『街道をゆく』、『司馬遼太郎全講演』等を読み返しています。

例えば1988年7月の福島県白河市の講演では、「東北人の悪いくせは、悲劇主義を持ちすぎるところにありますね。……東北はつまらない目にあってきたとか。たしかにつまらない目にもあってきましたが、あまり言わないほうがいい。……昔からの東北びいきとして、東北という歴史と伝統のある風土に自信をもたなくて、どうして東北が存在できるのかと、いつも思っています。」（『司馬遼太郎全講演3』・朝日文庫）

東北の歴史と伝統のある風土に自信を持って、震災からの復興、地方創生等これからの東北を考える時に、このメッセージを噛みしめています。最近、東北が連携し、国内外に向けて東北の魅力をブランド化、ストーリー化して発信しよう、との動きが活発化してきています。今こそ東北が「チーム東北」として連携して取り組む時で、企業、自治体、大学、関係機関等にその気運がこれまで以上に盛り上がり、大いに期待できます。

観光面では、国も訪日外国人旅行者の拡大に力を入れています。東北の交通インフラの整備も、新たに北海道新幹線も加わった新幹線ネットワーク、高速道路ネットワーク、そして民営化された仙台空港等着々と進んでいます。アジア地域での東北の認知度は、国内他地域に比べても低いとの最近の調査結果も出ておりますが、これは逆にチャンスと捉えるべきでしょう。昨年ミラノで開催された食の国際博覧会に「チーム東北」として参加する機会を得ましたが、東北の地酒、牛肉等の食材、そして東北の伝統芸能等に会場は大いに沸きました。東北はもっと自信を持って良いとの思いを強くしました。三陸を世界トップの水産ブランドにしようと広域連携し、三陸地域の活性化をはかろうとの動きも報道されています。

新たな東北の可能性の一例として、日本が得意とする素粒子物理の分野での国際的な研究施設（ILC）を日本に誘致しようとの政学官民が連携した動きもあります。奥州北上山地が有力な候補地で、実現すれば東北の国際化の進展、あるいは東北の産業面、教育面等への様々な波及効果が期待されるでしょう。そんなビッグプロジェクトも東北には必要です。新しい東北の姿も見えてきています。震災から5年が経ち、東北は復興に向け粘り強く取り組んでいかなければとの想いを強くしております。

（当財団 評議員）